

中国短期大学

宇野保子

目的 「日本における洋服受容の過程」を一連の研究テーマとしているうちに、洋裁書の存在に気づいて久しい。すでにこれまでの研究で、洋裁書の発刊数や内容が、洋装化の過程に反映されていることを確かめてきた。本研究では洋装史上反動期とよばれる明治20年代の沈黙を破って、再び発刊された30年代の洋裁書を研究対象として、この時代の洋裁書と洋装の特徴を明らかにし、さらに洋服受容の過程に関する考察を深めていく。

方法 国立国会図書館所蔵の洋裁書の中から、発刊年 内容共に本研究の目的にかなう9文献を選び、各文献ごとに、内容 構成 編集方法等について検討した。またこの時代の風俗一般、衣生活等を探る参考資料としては、従来どおり「新聞集成明治編年史」「女学雑誌」「風俗画報」を使用した。

結果 30年代の洋裁書は、明治前期のような洋服の啓蒙書 教養書におわる内容のものはみられず、すべてが実用書となりうるものである。しかも親しみやすい一般向き、本格的な職業人向き、基礎と理論を重視した学生向きと各目的に応じた内容が出そろっている。裁断法に関しては、寸法断ちはみられず、型紙を用いて断つフリーハンドに統一され、使用尺もほとんどがインチである。また記載されている服種は、当時さかんに受容されていた紳士服が多く、着用者が少なかった婦人服の記載は、職業人向きの洋裁書に限られている。この時期の洋裁書は、明治20年頃の洋服全盛期に洋服裁縫を業とする人たちが留学、研修、実施経験等を経てまとめたものと推察され、それが内容を充実させている原因と考えられる。